

## ICTはツールにすぎない

ICTが人類の生活スタイルを劇的に変化させると言われ始めてから、すでもう久しい。Eメールやインターネットの普及、そしてスマートフォンが登場するや、またたく間に市場を席巻してしまふなかで、私たちの社会は文字どおりコピキタス状況を迎えようとしている。いつでも、どこでも、誰でも「つながる」ことのできる暮らし。

しかし反面、新聞やネットニュースで配信されるのは、「キレる」犯罪、いじめ、孤独死等々。そういう出来事の件数は減少するどころか、むしろ増加の一途をたどっているように感ずるのは私だけではないだろう。たとえば、一緒に酒を飲んだ

会社の同僚同士が、帰宅途中で口論になり、カッとなって一方が駅のホームで相手を線路に突き落したりするようない人間関係の危うさを示すような事件も、近年後を絶たない。情報ネットワークが発達しても、人間同士の絆はなかなか密になっていかない印象を受ける。

結局のところ、ICTがどれだけ飛躍的に発達を遂げようとも、それは所詮ツールにすぎない。だから有効に活用できるか否かは、ひとえに使い手の私た

# ICT社会と「キレる」人々

## 正高 信男 (まさたか・のぶお)

京都大学霊長類研究所教授。1954年大阪生まれ。大阪大学人間科学部卒業、同大学院人間科学研究科博士課程修了。東京大学理学部助手、京都大学霊長類研究所助教授などを経て現職。専門は認知神経科学。主な著書は、『ケータイを持ったサル』（中公新書）、『ゲームキャラしか愛せない脳』（PHP新書）など。

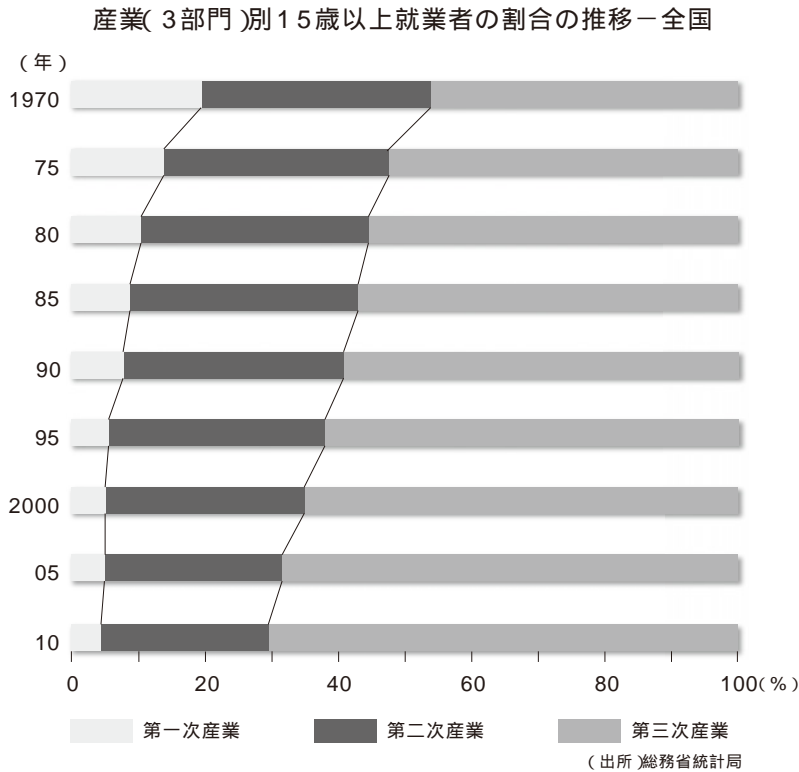
ちにかかっている。しかも使い手たる人間の資質は、そう易々と変化し得るものではないのである。

## 注目される「発達障害」

ICTの発達と人間の資質の可変性が作り出す矛盾は今日、「発達障害」の顕著化という現象として私たちの前に出現している。「アスペルガー症候群」という診断名が、一般の人々にも広く知られるようになったのも、その一端である。

世の中には、生まれながらに社会性が乏しいという人物が決して少なくはない。知能は全般にわたってきわめて普通であるにもかかわらず、他人とのつき合いや交渉を苦にする人々、あるいは、相手の気持ちや場の空気が読めない人々。そしてまたそういう人々が、周囲とのコミュニケーションを適切にとれない結果、トラブルを引き起こし時として暴力沙汰になるといった事例などもよく耳にするようになってきている。

私自身、研究者としてこのような障害の研究と支援に関わっているのだが、非常にしばしば、あのような症例は最近、増えているのですか」という質問を受ける。そうではない。実は環境が変わったのだ。



そもそも、このような障害は、圧倒的に生物学的なものなのである。そう一朝一夕に、同様の資質を持った人の数が増えたり減ったりするものではない。実際には過去にも今とまったく同じように、社会性の乏しい人々は歴然として存在していた。その数は、全人口の5〜10%にも及ぶ。ただ今日と異なるのは、かつては人づきあいが苦手であったところでそのことは本人にとつて、日常生活を営む上で何の支障にもならなかったという点にある。農業や林業

に従事している限りでは、そのことはほとんどハンディキャップにならないだろう。職人にいたっては、むしろ人と口をきくのがあつくな方が、長時間の骨の折れる作業に打ち込むには、有利であつたかもしれない。

### つながりたい人々の激化するストレス

ところが21世紀の日本では、第一次産業に従事する人は全体の6%に落ち、平均年齢は60歳を超え、反対に7割以上がサービス業に携わるようになってしまった。しかも他人とのやりとりを苦とする人々の数は、依然として変わらないのである！

そういう人々にとつて、社会が「ヒキタス化」することは、すなわち「生きづらさ」が増すことを意味している。本人がそれを自覚するかしないかは別として、生きづらさのストレスは確実に程度を強めている。そしてある時、それは限界点に達するかもしれない。「もうダメだ」と突然に感じたとき、本人ですら、それまで予想だにしなかつた行為に走つてしまつたかもしれない。

いつでも、どこでも、誰でも、つながる「こと」のできる暮らしとは換言すれば、いつでも、どこでも、誰かと「つながっていない」といけない暮らしなのである。「嫌なら切ればいいじゃないか」と反論する人がいるかもしれないが、それは「つながる」ことのできる資質の人間の発想にすぎない。つながれない資質の人間には、ユビキタスのハードウェアが存在すること自体が、障害を持つ現実の証しなのであることを失念してはならない。

CEL